

俗信と「文明開化」

明治初年代から一〇年代にかけて

荻野夏木

Incantations and Civilization in the Beginning of the Meiji Era

OGINO Natsuki

はじめに

- ① 明治初年代におけるまじない、信仰の世界
- ② 「迷信」撤廃の摸索
- ③ 明治一二年コレラ流行に見る庶民とまじない
- ④ 「開化」との衝突の減少
おわりに

【論文要旨】

まじないをはじめとする俗信の類が、現代に至るまで絶えないのはなぜか。この問題を考えるにあたり、「近代」という新たな価値観が強く意識された明治初期に、庶民の間でまじないや祈禱がどのように行われていたか、それが社会からどのようなまじしを向けられていたかを検討した。

明治初年代、庶民の生活においてまじないや祈禱などは、とくに病氣治しなどの目的で日常的に接するものであった。国や地方行政がさまざまな風俗取締令を出すとともに神官・僧侶らを通じてこれらの「旧弊」をあらためようとする一方、民間でも「開化」を支持し広めていこうとする動きがあり、これらは出版物などによって「迷信」撤廃の啓蒙活動を広げた。行政と民間の活動は必ずしも目指すところや手法が一致していたわけではなかったが、まじないや祈禱を「正しくない信仰」「存在し得ないもの」として位置づけ、その喧伝の勢いもすさまじかった。

だが、明治一二年のコレラ大流行時を中心に一〇年代の庶民の生活や行動を見てい

くと、そこには上記の激しい「迷信」撤廃を経てそれ以前からの信仰の系譜が生きていることがわかる。とくにコレラ流行のような大きな危機に直面した際、人々は従来の病氣治しにのっとった行動、すなわち病氣を司る悪神、悪霊を追い出すための祭、集団祈願、守札などのまじないを優先し、行政の指導と対立することすらあった。そうした行動は若者が率先して担っていることも多かったり、地方行政の末端もこの動きに加担しているケースすら見受けられた。だが、これらは厳しく取り締まられ、やがて表立った衝突は減少していく。

こうした潮流の中でも、まじないや祈禱は人々の生活に活かされ、地域社会に継承され続けた。その根強さに、まじないをはじめとする俗信がいかに庶民の生活と密着していたかが表れている。やがて根付いていく近代的な制度・文化とも折り合いをつけながら、人々の意識に複数の論理を形成していったのである。

【キーワード】まじない、文明開化、明治初期、病氣、庶民